

博物館友の会との連携強化に向けて

—大学附属博物館としての課題と試み—

東京農工大学科学博物館 ○高木愛子、中澤靖元、梅田倫弘

1. はじめに

東京農工大学博物館友の会（以降、友の会）は昭和 55 年に発足し、以来博物館と共に活動を続けている。特にサークル活動は、特徴ある活動として外部からも注目された。しかし長年の活動の中で、大学附属博物館としての特殊な事情も相まって、博物館と友の会の足並みが揃わなくなるなど課題も山積している。そこでこの度、耐震改修工事による博物館休館を機に、友の会との関係性の再検討を行った。本稿では、友の会の活動および今回の試みの要点、今後の展望についてまとめた。

2. 東京農工大学科学博物館の歴史

国立大学法人東京農工大学科学博物館（以降、博物館）は、明治 19 年農商務省農務局蚕病試験場に設置された「参考品陳列場」を起源とする。蚕病試験場は、東京農工大学工学部の前身であり、微粒子病に関する各種の試験研究を行う機関として設立された。以後本学部は、東京蚕業講習所、東京高等蚕糸学校、東京繊維専門学校などを経て、各時代の要請に応じた養蚕・製糸教育を施し、多くの人材を世に送り出してきた。現在の東京農工大学では、繊維のみならず、バイオテクノロジー、機械工学、エレクトロニクス、情報工学など、多種多彩な教育・研究へと発展させている。

参考品陳列場では、おそらく参考品の収集・公開を行うとともに、ウィーン万国博覧会で収集した資料なども集められていたものと思われる。その後、明治 32 年の東京蚕業講習所への改組を機に、陳列場は「標本室」へと改称した。標本室は広く蚕糸業全般に関するものを対象とし収集陳列が行われており、設置当初から現在の博物館施設と同様の機能を有し、学内のみならず、広く公衆の教育に貢献していた。当時の資料は、今も変わることなく貴重な所蔵品として当館に保存・展示している。

昭和 27 年には、博物館法に基づく「博物館相当施設」に指定され、名称も「繊維博物館」



図 1 大正時代の標本室
(東京高等蚕糸学校絵葉書、アスカヤマ写真館発行)

と改称し、取り扱う資料も繊維関連全般を対象とするようになった。

これまで工学部附属の博物館であったが、平成20年に改組が行なわれ、農学部を設置された「近代農学資料室」および「近代農機具展示室」と合併し全学組織となった。併せて本学の様々な教育・研究活動を発信する場としての役割も新たに付加され、参考品陳列場から120年以上にわたり収集されてきた繊維関連資料群とともに、本学の最新の教育・研究成果の一般公開を行っている。

3. 博物館友の会について

1) 発足の経緯

友の会は昭和55年4月に、博物館の意向により発足した。当時の博物館側の目的としては、会員を通して博物館への不満をより効果的に館に流し、博物館改善に役立てること、博物館資料や施設を会員が活用することで、博物館の活性化を担うこと、当時大学内で博物館の立場が弱くなりつつあったため、市民の応援団を作り活動を盛り上げることで、大学へのアピールとする狙いがあったようである。

発足に先立ち入会希望者を募ったところ300名もの希望者が集まった。そこで友の会準備会と称して集会を開催し、入会希望者と共に友の会の活動や会規則についての検討を重ね、昭和55年4月に「繊維博物館友の会」としてスタートした。

2) 友の会の活動

友の会の活動目的として1) 集会活動（講演会、講習会、見学会など）2) サークル活動（テーマごとのグループ学習）3) ボランティア活動（博物館の援助活動）の3テーマを掲げた。初期は講習会や見学会などの集会活動が中心であったが、サークルについては、他博物館にないユニークな活動として当初から発足が求められており、友の会発足の一年後の昭和56年4月から開始している。

サークル発足初年度は、①織物、②ひも結び、③組ひも、④手紡ぎ、⑤レースの5サークルから始まった。当初は博物館関係者や職員が各サークルの講師となって指導に当たり、サークル定員については、減れば追加募集を行っていたが、昭和61年から「4年生システム」が全サークルに導入され、4年間で完成するカリキュラムも次第に完備していった。指導体制についても、



図2 友の会サークルが製作した作品（作品展より）

初期の「講師による教室」から、サークル修了生が4年間かけて学んだ技術を5年目に下の学年に指導することで、自らの知識と技術を伝承する「集団指導（マネージャーシステム）」へと移行した。このシステムにより、自分が講師になるという責任感が生まれるとともに、学ぶことの楽しさと教え合うことの楽しさが体験できる、より充実したサークルへと発展した。

現在は、①織物、②ひも結び、③組ひも、④手紡ぎ、⑤レース、⑥和紙絵、⑦型絵染、⑧藍染、⑨紬瑠（つる）かご、⑩わら工芸、⑪手編、⑫絹といった、繊維に関連する12のサークルが活動を行っており、約250名が在籍している。各サークルのカリキュラム内容の学習は勿論のこと、一般の方々にサークル活動のエッセンスを体験してもらう「サークル講習会」や、1年間の活動の成果を発表する「サークル作品展」など、「サークル活動」が友の会の中心的な事業として、すでに30年以上にわたる活動の歴史となっている。

4. 大学博物館と友の会の課題

1) 大学の法人化と任意団体としての独立

発足以来、博物館の所属団体として博物館の指導・管理の元、活動を続けてきた友の会だが、平成16年の東京農工大学の国立大学法人化に伴い、博物館側による友の会の会計事務の取り扱いが禁止され、別組織として自主的な運営が迫られることとなった。

平成18年には友の会会則を改正し、会員より選出される代議員、運営委員、会計、会計監査などの諸役員を設け、各事項は役員会での審議を

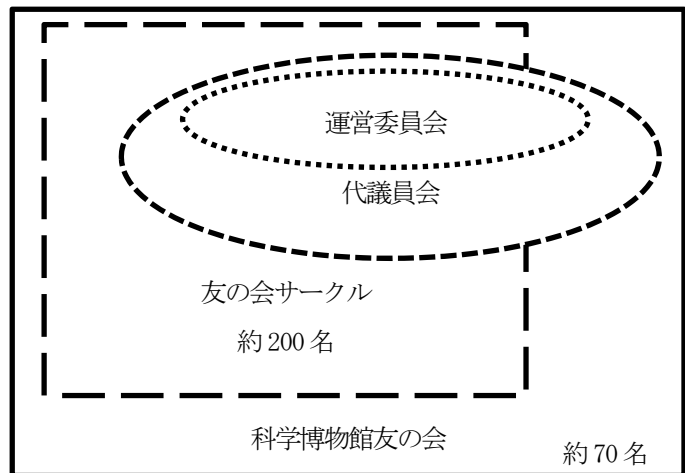


図3 友の会会員構成図

を経て、総会によって決定される独立した体制が整えられた。以後、友の会は博物館の手を離れ、館外での研修やバザーへの参加、ワークショップや小学校授業支援など、自主的に様々な活動を活発に展開している。

一方で、組織上は切り離したものの、名称は「東京農工大学科学博物館友の会」であり、活動場所も博物館である以上、博物館が関与する仕組みも設けられた。しかし相互の関係性については明文化されておらず、継続的な連携を図ることができなかった。その結果として、博物館側は友の会の活動内容を完全に把握することが困難となり、友の会活動の万が一のリスクを懸念し、危険視する傾向が強まることとなった。

2) 博物館の全学化

前述の通り、博物館は農商務省農務局蚕業試験場の参考品陳列場以来、一貫して繊維の専門博物館として活動を続けてきたが、平成20年に全学化に伴い、その対象は大学の学術資料全般へと拡大され、併せて本学の様々な教育・研究活動を発信する場としての役割も新たに付加された。繊維とは無関係のテーマの企画展や、資料寄贈の依頼も増えてきており、従来のように繊維関連を重視することは出来なくなってきている。一方、友の会も発足以来、繊維に関連するサークルを中心として活動を続けており、次第に博物館の目指す方向と友の会の活動内容の足並が揃わなくなりつつあった。

また、従来工学部附属施設として使用していた工学部における博物館のスペースは、全学組織化したことで縮小され、友の会も従来通りに活動を続けることが困難となった。そのため、友の会に「伝統工芸会」を設置し、12のサークルを5つの部門に統合することでサークル活動のスリム化を計ったが、望んだ結果を得ることは出来なかった。

表1 友の会伝統工芸会

部 門	グループ (元サークル)	平成22年度
		会員数
工芸第一部門	絹 グ ル ー プ	21名
	手紡ぎグループ	20名
工芸第二部門	藍 染 グ ル ー プ	19名
	型 絵 染 グ ル ー プ	22名
工芸第三部門	手 編 み グ ル ー プ	10名
	織 物 グ ル ー プ	21名
	レ ー ス グ ル ー プ	25名
工芸第四部門	組 ひ も グ ル ー プ	22名
	ひも結びグループ	22名
工芸第五部門	紬 瑠 か ご グ ル ー プ	24名
	わ ら 工 芸 グ ル ー プ	12名
	和 紙 絵 グ ル ー プ	12名
	計	230名

5. 連携強化に向けての試み

1) 協力団体としての位置づけ

様々な問題を抱えながらも、博物館にとって友の会は、長年培った地域社会との繋がりや、現在も主要コレクションである繊維関連資料との相互効果、社会から求められる生涯学習活動の長年の実践の場として、非常に大きな価値を持っている。

そのため、この度の耐震改修工事に伴い友の会も休会するのを機に、博物館と友の会の関係性を検討し、双方の規則改正を行った。大学法人化により友の会を別組織にしたものの、博物館の運営規則には、外部団体への対応については一切記されていなかった。そこで、友の会を博物館協力団体として位置付け、運営規則の事業項目に『博物館の事業に賛同する団体・企業等との連携・調整に関すること』を追記することで、友の会の活動内容の審議、友の会活動の支援、施設提供などは博物館業務の一環とした。

併せて友の会会則の目的を、博物館に対する支援活動を重視した内容に改正し、協力団体としての位置づけを強化した。また、友の会役員の一として博物館職員が運営に携わるとともに、友の会の活動計画は博物館運営委員会にて審議・承認を行うことで、最高意思決定機関を博物館運営委員会と定めた。

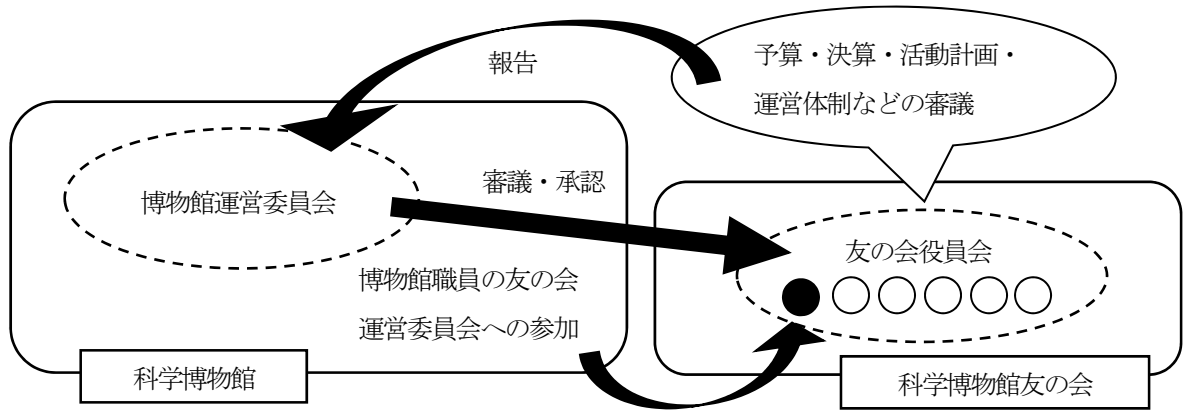


図4 博物館と友の会 概念図

2) サークル活動の改革

また今回の耐震改修工事に伴い、友の会の活動スペースを縮小せざるを得なくなった。リニューアルを機に新しい体制でスタートできるように、休会中に友の会役員と対応策について検討を重ねた。その結果、博物館内のみで活動を行っていただけるよう、新カリキュラムを作成し、平成27年までに完全移行することとなった。新カリキュラムでは、4年生がマネージャーとして下の学年の指導に当たり、一学年の定員を5名から4名にすることで、活動人数を約100名減らし活動スペースのスリム化を目指している。従来のマネージャーは、カリキュラムを修了した会員が担っていたが、強制ではないため年によってはマネージャーが不足し、OBGに助けを求めなければならないサークルもあった。マネージャーまでをカリキュラムの一環とすることで、会員の責任感を高め、友の会特有のマネージャーシステムの安定化を図ることにした。併せて、途中退会などによってマネージャー不足を引き起こさないよう、編入制度を新たに設けた。

活動スペースの問題から始まった検討会であったが、友の会側からもカルチャースクール感覚の会員や、所属人数が少なくマネージャーシステムが成立しなくなっているサークルがあるなどの課題が挙げられた。長年続けられてきたサークル活動全体を見直し、博物館におけるサークル活動方針を明文化することで、博物館協力団体会員としての自覚を促し、執行できないサークルについては存続の可否を検討できるようにした。

なお、現在は繊維に関する活動のみであるが、博物館の方向性の変化に伴い、将来的に繊維分野以外のサークル活動の発足も視野に入れ、伝統工芸会は廃止し友の会のサークル活動としての位置づけに戻している。

6. 今後の展望

友の会やボランティア組織については、様々な場面で議論がなされている話題であるが、本事例は大学の付属施設であるという点が、更に問題を複雑にしている。博物館では広く受け入れられているボランティア組織も、大学では途端に位置づけが難しくなる。他の大学附属博物館がグレーゾーンで友の会を運営する中、この度の耐震改修工事による休館を機に、長年山積した課題を解決すべく、友の会を博物館協力団体として位置付ける試みを行った。友の会の活動業務に関わることを博物館業務の一環とし、友の会の自主性を尊重しながらも、博物館が意思決定に関与する仕組みとした。現在は、具体的な活動の約束事や審議の方法などの検討を行っている。

友の会は30年以上にわたり、サークル活動や講習会など、活動目的を活発に展開してきたが、ボランティア活動に関しては、当初から「会員の意向により実施」とされていた。博物館からも、企画展示や資料整理など必要に応じて単発的なボランティア募集は行われていたものの、他の活動のように定例化されることはなかった。任意団体となって以降、ボランティア活動も次第に行われるようになってきたが、博物館との連携が希薄化する中、博物館や大学側がその実績を十分認識しているとは言い難い。しかし、大学附属博物館という特殊な環境において、博物館協力団体としての位置づけを確固たるものにするため、友の会による博物館支援活動の内容を把握し、その実績を博物館からも内外へ積極的にアピールしていくことが重要である。

また現在の友の会は、サークル活動がその大半を占めており、サークル修了とともに友の会を退会する会員も少なくない。引き続き友の会会員として、習得した技術を博物館で活かせるようなボランティア活動を、博物館と友の会が連携して働きかけ行くことが必要である。そして、定例活動を行うボランティアグループを増やしていくことで、友の会の博物館協力団体としての活動強化を図っていくことを考えている。